

軍艦マスト型の平和祈念塔と美保関沖事件

——92年前の軍事演習中の悲劇——

昭和2年(1927)8月24日の夜中、無^む灯火^{とうか}で軍事演習を行っていた大日本帝国^{大日本帝国}連合艦隊60余隻のうち軍艦^{せき}4隻が、美保関沖^{みほのせきおき}で衝突^{しょうとつ}し、119名の死者と多数の負傷者を出した。軍艦^{じんつう}「神通」が駆逐艦^{くちくかん}「蕨」^{わらび}に衝突^{しょうとつ}し、「蕨」は沈没^{わらび}。後続の軍艦^な「那珂」も駆逐艦^{くちくかん}「葦」^{あし}に衝突^{しょうとつ}し、共に損傷した。なぜ海軍がこのような計画を立てなければならなかったのか。5年前、ワシントン軍縮条約で保持できる主力艦^{主力艦}の比率をイギリス5、アメリカ5、日本3と決められた。そのため日本は、補助艦^{くちくかん}(駆逐艦、巡洋艦^{じゆんようかん}など)の補強へと向かい、訓練により海軍力の劣勢^{れつせい}を克服^{こくふく}しようとしていた。2年後、美保関町民らの義援金^{ぎえん}により、美保関五本松公園に日本海軍

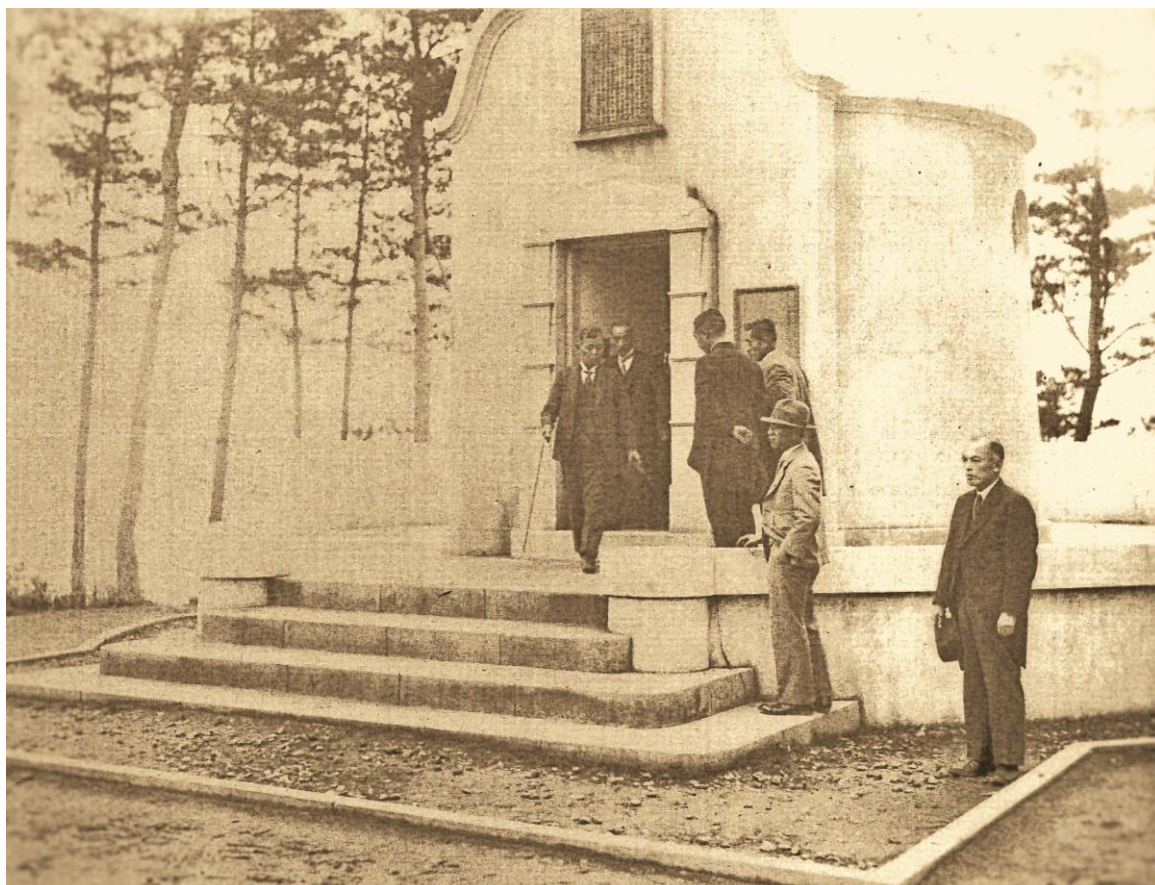
を象徴する軍艦マスト型の慰霊塔^{いれいとう}が建設された。塔正面の「慰英^{いせい}霊」の文字は元帥^{げんすい}・東郷平八郎^{きこう}が揮毫した。戦後「平和祈念塔」と名を変えて現存する。



軍艦マスト型をした平和祈念塔

事件の翌年5月、美保関町(現松江市)の町民が松江市にある松陽新報社^{しょうよう}へ、英霊^{えいれい}を安んじ永遠^{ついで}にわたる追憶^{追憶}の資料とするため慰霊塔^{いれい}の建設を依頼した。同社副社長^{かつべもと}・勝部本右衛門氏^{えもん}を中心に義援金^{ぎえん}を募集し、高松宮家^{かみ}・伏見宮家^{ふしみ}の下賜金^{かじ}を含め義援金^{ぎえん}は13,000円に達した。建築材料学の権威で早稲田大学の吉田享二教授^{きやうじ}により設計された慰霊塔は、昭和4年(1929)、美保関五本松公園に建設された。日本海軍を象徴する軍艦マスト型で、昭和初頭の時代の個性がよく表れ、事件の起こった20カイリ(37km)沖の日本海を望む。

平和祈念塔 現状写真 撮影西島



慰霊塔を訪
問する前内
閣総理大臣
若槻禮次郎

昭和10年(1935)、松江に帰省した若槻禮次郎は、美保関公園の慰霊塔を訪ねた。

原写真

石倉孝昭氏蔵

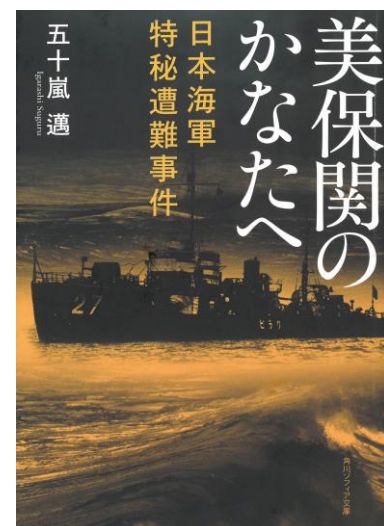
美保関沖に消えた人々の遺影

この遺影は、死者119名のうち101名分である。遺族から提出されたもので、駆逐艦「^{くちくかん}蕨」と共に海に沈んだ艦長・五十嵐^{いげら}恵氏の遺影もある。

殉職者遺影は、高橋一清氏が蒐集・保管されていたが、このたび松江歴史館に関連資料と共に寄贈された。

慰霊塔の竣工を伝える松陽新報

昭和4年(1929)11月1日、「海軍殉難将士慰霊塔」が竣工した。「最もよき記念物」(島根県知事・大森佳一)、「不滅の国家的事業」(美保関町長・三代實)、「意義極めて深し」(松江市長・石倉俊寛)の見出しとともに、建設会長・勝部本右衛門らの談話を載せる。なお丁度、一年前に、境港市の有志によって台場公園(境港市)にも慰霊塔が建てられ、松江市出身の京都帝国大学教授・三浦^{みつら}周行の追悼文が刻まれている。



ノンフィクション・ノベル『黒き日本海に消ゆ——海軍・美保関遭難事件』

沈没した駆逐艦「^{くちくかん}蕨」の五十嵐^{いげら}艦長の息子^{すぐる}邁氏が、美保関沖事件の真相に迫った。事件から51年後の昭和53年(1978)11月に講談社から刊行された。その27年後の平成17年(2005)12月に、松江観光協会 高橋一清観光文化プロデューサーの尽力により、『美保関のかなたへ——日本海軍特秘遭難事件』と改題し文庫化された(角川ソフィア文庫)。解説は直木賞作家で『戦国はるかかなれど 堀尾吉晴の生涯』の著者・中村彰彦氏。

(担当 西島)